

大洗町宮田遺跡 埋蔵文化財発掘調査 現地説明会資料

大洗町教育委員会

関東文化財振興会株式会社

宮田遺跡は涸沼川右岸の台地上に位置し、弥生時代から奈良平安時代にかけての集落遺跡です。周辺には、同時期の宮田下遺跡や前坏遺跡、縄文時代から弥生時代の双葉町下養鰻所遺跡などが知られています。今回の調査は町道新設工事に伴うもので、道路計画地の約6,000平方メートルについて、大洗町教育委員会の委託を受けた関東文化財振興会株式会社が、昨年8月から発掘調査を進めています。現在までの調査で、耕地造成で削平を受けた部分を除き、全域に弥生時代～平安時代の集落が広がっていることが判明しました。以下に概要を報告します。

竪穴建物跡

これまでに約80棟の竪穴建物跡を確認できました。最終的には100棟に達する見込みです。各期の建物跡が重なり合い、さらに牛蒡栽培のための耕作による破壊が激しいこともあって、時期の特定が難しい状況ですが、出土品の内容などから時期を判断できた建物跡は、現時点において次の通りです。

弥生時代後期	4棟
古墳時代前期	3棟
古墳時代中期	4棟
古墳時代後期	10棟
奈良・平安時代	14棟

このうち調査区中央部の建物跡群密集域で確認された古墳時代中期の建物跡2棟からは、滑石製模造品3点（剣形2・鏡形1）が出土しました。また調査区東側の同期の建物跡は1辺が9m近くあり、この時期の建物としては規模が大きく、炉の位置なども変則的で、集落内において特殊な施設であったことをうかがわせます。

古墳時代後期（鬼高期）の建物跡からは土錘や土玉、さらに浮子として使用したと推定される軽石片などの出土頻度が高く、漁撈に従事する集団が居住していたことがうかがわれます。1辺が9m近くある

大型の建物跡が3棟認められましたが、うち1棟には床の上に焦土が厚く堆積しており、火災に遭って焼失したことがうかがえます。平安時代の建物跡1棟にも火災の跡が認められました。

方形周溝墓

調査区中央西寄り南側で、古墳時代前期に築造された方形周溝墓の一部と推定される溝が検出されています。周囲にある古墳時代前期の建物跡群に居住する集団が、その造営に関与していた可能性が高いと思われます。

大溝

調査区西端の台地周縁部を2条の大溝が巡っていました。出土した陶磁器の破片から判断すると、鎌倉時代後半から室町時代前半頃に造営されたようです。遺構としての性格は不明ですが、何らかの防御施設と推定することも可能です。

鉄製品

鉄製品の出土頻度が比較的高いのも、本遺跡の特徴と言えるようです。大半は錆化が激しくその器種を判別することが困難ですが、確認できたものとしては、鎌、刀子、鏃、刀装具（小型の鐔）などがあります。

